

私に与えられたタレント

奨励	後藤 正敏〔ごとう・まさとし〕
奨励者紹介	日本キリスト教団豊中教会牧師

「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを預けて旅に出かけた。早速、五タラント預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。同じように、二タラント預かった者も、ほかに二タラントをもうけた。しかし、一タラント預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。さて、かなり日がたつてから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラント預かった者が進み出て、ほかの五タラントを差し出して言った。『御主人様、五タラントお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』次に、二タラント預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』ところで、一タラント預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントをこの男から取り上げて、十タラント持っている者に与えよ。だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。』」

(マタイによる福音書 25章14―30節)

人は自らの出発点を自分の意思で選び取ることはできません。生まれてみたらそこに両親がいて、家族や近所の人が自分をとり囲んでいました。男か女であることも自分で選んだわけではありません。生きる時代や場所、国籍も自分で選んだわけではありません。その意味では私たちは与えられた出発点からスタートするほかはないわけです。しかし、備えられた出発点からどのような道を選び取るかは神さまからすべての人に与えられており、正しく応答する義務があります。その意味で責任を伴います。私たちの人生には、与えられたものと創り出していくものの二つの側面があると思います。

このタラントの話は、たとえ話としてイエス様が語られたものです。しかし、皆さんには「タラント」よりも「タレント」という言葉のほうになじみがあると思います。この言葉に憧れる方、憧れた方もあると思います。しかし、もともとは今日の聖書に由来し、原語はギリシア語です。タラントはもともと重さの単位でしたが、やがて貨幣の単位として用いられるようになった経緯があります。そして、今や憧れのスターになったわけです。

タラントを預けて
旅に出る主人

聖書によると主人が僕(しもべ)たちにそれぞれ5、2、1タラントを預けて旅に出ました。しかし、その値打ちたるや途方もなく大きなものです。1タラントは6000デナリオンの値打ちをもっています。ばどう園で働いた労働者が1日1デナリオンの給料をもらったという話が聖書のなかに出てきますが(マタイによる福音書20章)、1デナリオンは当時の労働者の1日の賃金でした。そうすると、1タラントは6000日分の賃金となり、およそ私たちが20年ほど働いてやっと手にできる額ということになります。決して小さな金額ではないのです。むしろ、とてつもない大金です。換算すると1タラントで20年分、2タラントで40年分、5タラントではなんと100年分に相当します。とても私たちは100年も働けません。

この途方もない額が神さまから預けられたことが重要なのです。人は皆、神さまから多くの賜物を受け、期待されてこの世に遣わされていると聖書は告げています。その賜物も一人ひとりが違っています。この世的に相対的に評価するなら5タラントの者もあれば、2あるいは1タラントの者もいます。しかし、このたとえは私たちに人まねをしたり、人の才能をうらやんだり、ねたんだりする余地を与えません。そうではなく、人それぞれに豊かに与えられている自分の力に応じて、またその力に誠実に生きること、自分に与えられている道を自分らしく忠実に歩むことが奨められているのです。

5そして2タラントを預かった僕

さて、5タラント預かった僕は張り切って出て行き、それで商売をしてほかに5タラント儲けました。2タラント預けられた僕も、2タラント儲けて帰ってきました。5の人は10に、2の人は4にして帰ってきたのです。初めの二人の差は3タラントでしたが、ここへきて二人の間には6タラントの違いが生じています。しかし、イエスは決して人間をタラントの量によって評価したり、区別したりしていません。5タラントの者も2タラントの者も、働いてその実りをもって主人の前に出たとき、全く同じほめ言葉が与えられます。一字一句違いのない、全く同じ言葉です。この評価は注目に値します。

「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」(21、23節)。

私たちの理解としては、5タラントを倍にした方が2タラントを倍にした方より、多くほめてもらって当然だと思います。一方は5が10になり、もう一方は2が4です。その差は大きいのです。しかし働きには関係なく、全く同じ、一字一句とも同じほめ言葉なのです。

働きが量で評価されていないことがわかります。私たちの常識の評価は、収入や地位や知名度です。多い、高い、よく知られていることが高い社会的な評価となります。しかし、聖書の見方は違います。むしろ聖書は、当時の社会が見向きもしなかった人たちや、忘れていた人たちに注目します。徴税人、罪人、遊女や子どもたちが次々に舞台上に登場します。しかも、端ではなくて中央に、脇役ではなく主役として登場してきます。そして、このような人が真にキリストに出会うのです。出会って、キリストに生かされるようになります。さらにその喜びをもって、再び生きようになるのです。人間は主体的に責任をもって生きる者であり、自分の賜物にふさわしく誠実に生きることが求められます。その生きざまを神さまは高く評価するのです。

最後の言葉「主人と一緒に喜んでくれ」は私たちへの神の祝宴への招きの言葉です。「主人の喜びのなかに入りなさい」「あなたの主人の喜びに加わりなさい」とも訳せます。それは、祝いの食卓に連なるようにとの招きであり、天の国の祝宴への招待状なのです。

1タラントを
預かった僕

ところが1タラントを預かりながら、そのまま帰ってきた僕がいました。ここが面白いところです。この1タラントを預けられた人は、それを生かすことをせずに地の中に隠しました。そして、預けられたそのままを持ってきて、こう言いました。

「御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です」(24―25節)。

この男の心にあったことは何でしょう。厳しい主人が恐ろしかったのかもしれませんが。預かったお金を失ったり減らしたりしたら大変だ、なんとか無難にそれをもちこたえなくてはならない、そう考えたのかもしれませんが。これは、生真面目な人にありがちな姿勢です。用心深い人だったのかもしれませんが。世に「死蔵する」という言葉がありますが、せっかく与えられた賜物を失うことを恐れるあまり、日の当たらない場所にしまい込んでしまったのでしょうか。委託されたものを用い切らぬのであれば、それは取り上げられるよりほかはありません。与えられた賜物に感謝して、神さまに支えられ導かれながら、自由に、時には大胆に、用いることが期待されていたのに・・・、それをしなかったのです。人生はただ一度きりです。

神への誠実

このたとえ話では5タラント預かった人、2タラント預かった人がいかにして上手にお金を増やしたかを問題にしてはいません。託されたタラントに忠実であったか、預かったものを生かしたか、そのことが評価の基準であり、誠実さがほめられているのです。それに対して1タラント預けられた僕はそれを生かす務めを放棄して、土の中に埋めてしまいました。守ることしかしませんでした。その行いが怠け者あるいは臆病者として叱責されているのです。三人の僕が、それぞれ異なるタラントを預けられたように、その働きもまたそれぞれ異なっていて良かったのです。なにより主人は、結果の金額の高さではなく、与えられ預けられたものへの誠実さを問題にしたのです。もし結果が思わしくなくても、その人がその人なりに働いて努力したのであれば、主人はその働きを認め、たとえ失敗しても、何回でも何度でも、立ち直る機会を与えたはずなのです。

神さまから与えられた道を自分らしく、自分にふさわしく歩むということが求められています。このタラントの譬えから私たちは、私たちの人生の主は神であり、私たちはこの神の守りのなかで、それぞれに与えられた賜物にふさわしく生きることが勧められている、そのことを知らなくてはならないでしょう。私たちの人生を導く神がいらっしゃること。そして、あたりを気にする人の評価ではなくて、世界を歴史をそして私たちを支配する、神さまの評価のあることをぜひ知っていただきたいと思います。